し、唐の百子帳の製、事文類聚續集卷十一に見へたり、其文義を考るに、柳の木を撓め曲げて、帳の骨を作る、これを用る時には、骨を張り開き、これを用ひざる時は、骨を弛めたゝみて置くやうにしたる物にて、今世の保呂蚊屋の骨の如き、其骨を張ひらきて、上に青氈の帳を冒ひかける也、青氈は青き羅紗なり、毛カリナリ、總體圓くして、頭高く、上尖りたるものと見ゆ、又文選、何平時が景福殿に、百子後宮と云語あり、注に百子又殿名とあり、百子殿といふ宮殿の名、是後宮にて妃妾の居處なるゆへ、百の子孫を產べき事を祝して百子殿と號する也、百子帳とは別の事なり、百子帳と號する意は、帳の骨の子數の多くあるゆへ、百子といひたる也、子とは骨をさして云也、此事かの事文類聚にあり、帳を作るに支度の多きゆへと云は非也、

〔漢書九十四匈奴〕漢使曰、匈奴父子同穹廬臥、師古曰、穹廬旃帳也、其形穹隆、故曰穹廬、

〔南史七十九夷貊〕河南、宕昌、鄧至、武興、其本並爲氐羌之地、〇中略有屋宇、雜以百子帳、即穹廬也、

〔酉陽雜俎續集九支植〕木龍樹、徐之高冢城南有木龍寺、寺有三層磚塔、高丈餘、塔側生一大樹、縈繞至塔頂、枝幹交橫、上平容十餘人、座枝杪四向、下垂如百子帳、

〔月令廣義二十三書夜〕百子帳詩話、唐人昏禮多用百子帳、制自戎虜穹廬之翻耳、捲柳爲圈、以相連鎖、百帳百圈、故名百子、

〔事物紀原八舟車帷幄〕拂廬

唐書吐蕃處於大氈帳、名拂廬、高宗永徽五年獻之、高五丈、廣袤各二十七步、其後豪貴稍以青絹布爲之、其始以拂於穹廬爲號也、宋朝每大宴犒、亦設於殿庭、曰拂廬亭、此蓋其始也、

〔代始和抄〕御禊行幸事

當日は大內より川原へ行幸なる、〇中略河原頓宮にいたりては、まづ御膳幄に御輿をよせて下御ならせ給ふ、これより腰輿にめされて、御禊の幄にうつらせ給ふ、主上は百子帳の內の大床子に著御し給ふ、百子帳といふは、檳榔をもて頂をおほひて、四方に帷をかけて、前後をひらきて出入